

## メディア特性に対する先有知覚の小学生から大学生までの比較<sup>†</sup>

後藤康志<sup>\*1</sup>

新潟医療福祉大学健康科学部<sup>\*1</sup>

学習者のメディア選択の背景にあるメディア特性に対する先有知覚、すなわちそのメディアがいかなる特性をもっているかの知覚に焦点を当て、その発達的な特徴を把握するための小学5年生から大学生までを対象とした調査を行った。結果として学年が上がるにつれてメディアの特性の違いをより大きく知覚できるようになることが分かった。小学5年生は本や新聞を速報性があると感じ、インターネットの信頼性が高いと感じ、小学6年生はテレビを信頼できると知覚しているのに対して、大学生はインターネットやテレビの簡便性や速報性は評価しつつも信頼性は低いといった具合に、学年によってメディアの特性を多様に理解していることが示唆された。

キーワード：メディア・リテラシー、先有知覚、批判的思考、メディア特性の理解、学年発達

### 1. はじめに

本研究は、メディア特性に対する先有知覚（そのメディアがいかなる特性をもっているかの知覚）に焦点を当て、メディア特性として情報の新しさ（速報性）、情報の確からしさ（信頼性）、好み（嗜好性）、使いやすさ（簡便性）の発達的な特徴を把握することを目的とする。

文部科学省は「メディアの特性を理解し、それを目的に適合的に選択し、活用する能力（文部科学省2002:62）」の育成の必要性を指摘する。こうした能力は、メディア・リテラシーと深く関わっている。メディア・リテラシーとは多様なメディアからの情報を批判的に受容・発信する態度・技能と捉えられ、メディア特性の理解がメディアに対する批判的思考に影響を及ぼしている可能性を指摘されている（後藤 2007a）。

メディア特性の理解に関する測定としてはメディア使用の経験や難しさ、信頼性に関する調査（鬼頭 2004）、メディアの効用感（無藤・白石 1999、中野 2000）などがある。また筆者らは、サロモン(1984)、佐賀(1988)、今井(1993)の先有知覚研究を発展させ、子どもはメ

ディアの利用経験が豊富になることでメディアの特性をより大きく知覚できるようになり、好むメディアを難しくなく、有用であると知覚できるようになることを見いだしている（後藤・生田 1999, IKUTA and GOTOH 2001, IKUTA and GOTOH 2002）。

本研究はこれらを学年発達という視点で発展させたものである。これまでの筆者の研究との継続の点から、メディアとして本、新聞、テレビ、インターネットを、メディアの特性として速報性、信頼性、嗜好性、簡便性を取り上げる。先行研究から、学年発達に伴い、メディアの特性をより大きく知覚できるようになることが予測される。また、個々のメディアについてもインターネットやテレビは速報性では優れるが、信頼性ではそれほどではないといった具合に知覚することが考えられる。

対象は小学校高学年から大学生までを対象とする。小学校高学年はピアジェの発達段階では具体的操作段階から形式的操作段階への移行の時期で映像視聴能力（映像表現による内容や技法の理解の能力）の研究発達でも小学校と中学校の間にギャップがあるとする説（東田・河野 1986a, 1986 b）、小学校5年生と6年生にギャップがあるとする説（生田ら 1995）がある。後藤(2007b)は批判的思考に小学5年生と6年生の間の断層を見いだしており、先有知覚にもこの間の差が予想できる。

メディア・リテラシーや情報教育のカリキュラム開発のための基礎的知見として、こうしたメディア特性の理

2008年3月30日受理

<sup>†</sup> Yasushi GOTOH<sup>\*1</sup>: Comparative Study of Preconception to Media Among Elementary School, Secondary School and University

<sup>\*1</sup> School of Health Sciences, Niigata University of Health and Welfare, 1398, Shimami-cho, Niigata City, Niigata, 950-3198 Japan

解の発達的な特徴の把握が重要である。しかし、そのようなデータが十分に蓄積されているとは言い難い。

## 2. 方法

### 2.1. 調査対象と調査時期

対象は小学5年生210名(男112名, 女98名), 小学6年生389名(男199名, 女190名), 中学生373名(男77名, 女296名, 1年104名, 2年169名, 3年100名), 高校生402名(男159名, 女243名, 1年117名, 2年114名, 3年171名), 大学生401名(男161名, 女240名), 合計1775名(男708名, 女1067名)である。対象となった学校は新潟市周辺の学校(小学校8校, 中学校3校, 高校1校, 大学4校)である。調査時期は2005年6月である。

### 2.2. 先有知覚の調査

IKUTA and GOTOH (2001), 後藤・生田 (1999) の項目を一部改変し利用した。「本を読む」, 「新聞を読む」, 「テレビを見る」, 「コンピュータを使う」という4つのメディア活動を4つの次元(速報性, 信頼性, 嗜好性, 簡便性)で一対比較法により調査する。一対比較における4つのメディア活動の可能な組み合わせからそれぞれの活動を選んだ回数(最高は全ての対で選択された場合で3回, 最低はどの対でも選択されない場合で0回)を測度とする。メディア活動間の距離を視覚的に捉えやすくするために, サーストンの一対比較法(ケースV)の手続きにより, 各次元について選択比率をZ値に変換し原点からの距離として表現した。

## 3. 結果と考察

### 3.1. メディア活動間の距離の分析

データをサーストンの一対比較法(ケースV)によって尺度化したのが図1から図4である。速報性の次元ではもっとも速報性の低いと知覚されているメディアが原点であり, 原点から離れるほど速報性が高いと知覚されている。以下, 信頼性の次元では最も信頼性が低いメディア, 好みの次元では最も好まれていないメディア, 簡便性の次元ではもっとも簡便でないメディアが原点に位置する。図をみると全体的に学年進行に従ってメディア活動間の距離が大きくなっている。

### 3.2. メディアの選択回数の比較

メディアの選択回数を測度として, 平均値差の分散分析を行った。5%水準で有意な差があるものについてシェッフエの事後検定を行った。選択回数の平均値差を比べることで, どのメディアをどう知覚しているかを学年で比較するためである。

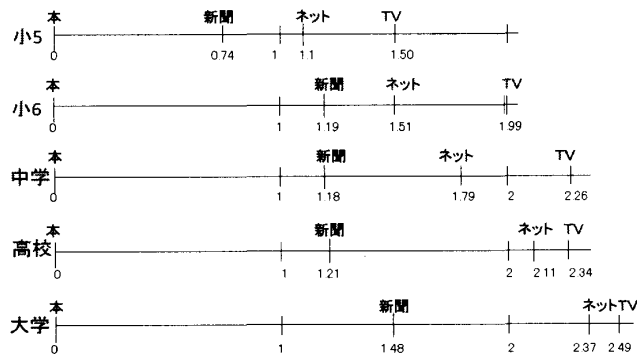


図1 速報性の次元

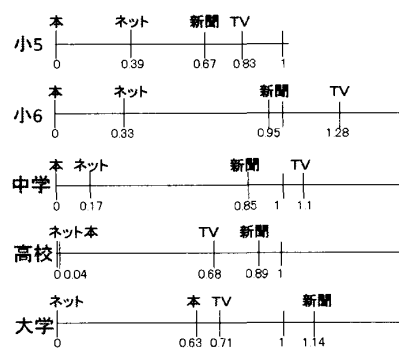


図2 信頼性の次元

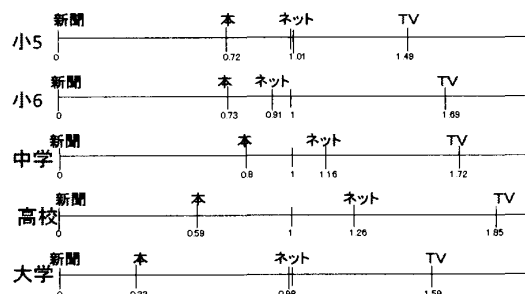


図3 嗜好性の次元

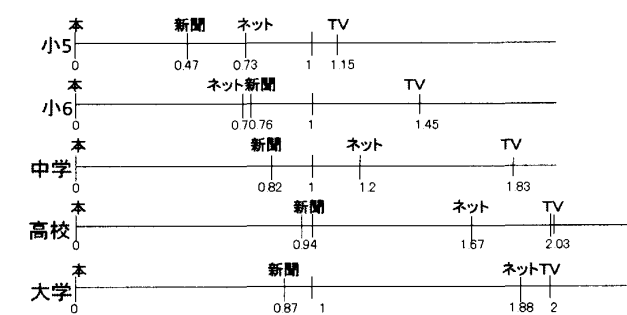


図4 簡便性の次元

### 3.2.1. 速報性

本の速報性については、大学生(平均値.09, 以下同様), 高校生(.09), 中学生(.13)よりも小学6年生(.18)が, 小学6年生よりも小学5年生(.43)の平均値が有意に高く, 速報性があると知覚している( $F_{(4,1770)}=25.57, p<.01$ ). 新聞は, 高校生(1.19), 大学生(1.22), 中学生(1.28)よりも小学5年生(1.34)が, 小学5年生よりも小学6年(1.47)が速報性があると知覚している( $F_{(4,1770)}=11.91, p<.01$ ). 高校生・大学生は本・新聞は速報性がないと知覚しているのに対して, 小学生はそういった区別ができていない. テレビは, 大学生(2.27), 高校生(2.32), 小学5年生(2.34)よりも小学6年生(2.49), 中学生(2.50)が速報性があると知覚している( $F_{(4,1770)}=11.18, p<.01$ ). インターネットは, 小学5年生(1.85), 小学6年生(1.87)よりも中学生(2.07)が, 中学生よりも高校生(2.37), 大学生(2.43)が速報性があると知覚している( $F_{(4,1770)}=37.42, p<.01$ ). 大学生・高校生はインターネットを速報性の高いメディアと知覚し, 小学5年生は本と新聞を, 小学6年生は新聞を速報性が高いと知覚する傾向にある.

### 3.2.2. 信頼性

本については小学6年生(.62), 中学生(.76), 小学5年生(.81)よりも高校生(.99)が, 高校生よりも大学生(1.52)が信頼できると知覚している( $F_{(4,1770)}=48.47, p<.01$ ). 新聞についてみると, 小学5年生(1.79), 小学6年生(1.89), 中学生(1.93)よりも高校生(2.18), 大学生(2.24)が信頼できると知覚している( $F_{(4,1770)}=21.61, p<.01$ ). 高校生・大学生は新聞の信頼性が高いと見なす傾向にある. テレビは大学生(1.61)よりも高校生(1.91), 小学5年生(2.05)が, 高校生, 小学5年生よりも中学生(2.31), 小学6年生(2.40)が信頼できると知覚している( $F_{(4,1770)}=51.26, p<.01$ ), インターネットは, 大学生(.62)よりも高校生(.91), 中学生(.98), 小学6年生(1.06)が, それらよりも小学5年生(1.34)が信頼できると知覚している( $F_{(4,1770)}=21.05, p<.01$ ). 大学生はテレビやインターネットに対してそれほど信頼をおいていない. 小学6年生と中学生はテレビを, 小学5年生はインターネットを信頼する傾向にある.

### 3.2.3. 嗜好性

本については, 大学生(.96), 高校生(1.05)よりも中学生(1.32), 小学6年生(1.35), 小学5年生(1.37)が好んでいる( $F_{(4,1770)}=14.89, p<.01$ ). 新聞は, 中学生(.40)よりも高校生(.45), 小学5年生(.48), 小学6年生(.51)が, それらより大学生(.60)が好んでいる( $F_{(4,1770)}=4.68, p<.05$ ).

選択回数自体をみると.4から.6であり, ほとんど好まれていない. テレビは小学5年生(2.35), 中学生(2.45), 小学6年生(2.50)よりも高校生(2.57), 大学生(2.57)が好んでいるようであるが, 全体として好まれ学年による差は明瞭にはなっていない( $F_{(4,1770)}=4.93, p<.05$ ). 最後にインターネットに対する好みは, 小学6年生(1.62)よりも小学5年生(1.79), 中学生(1.81), 大学生(1.85)・高校生(1.92)が好む傾向は見られるが( $F_{(4,1770)}=6.23, p<.01$ ), 差は小さい. 他の次元に比較して学年による差が明瞭ではない.

### 3.2.4. 簡便性

本の簡便性では, 大学生(.20), 高校生(.21), 中学生(.33)よりも小学6年生(.52)が, 小学6年生よりも小学5年生(.68)が簡便と知覚している( $F_{(4,1770)}=31.75, p<.01$ ). 高校生・大学生は.20前後であるから本を他のメディアとの比較で非常に難しいと知覚している. 新聞は, 大学生(1.10), 高校生(1.19)よりも中学生(1.32), 小学5年生(1.34)が, 中学生, 小学5年生よりも小学6年生(1.55)が簡便と知覚している( $F_{(4,1770)}=20.82, p<.01$ ). テレビでは, 小学5年生(2.23)より大学生(2.39), 高校生(2.45), 小学6年生(2.46), 中学生(2.53)が簡便と知覚し( $F_{(4,1770)}=5.98, p<.01$ ), 小学5年生とそれ以上の間に差があるものの差は小さい. インターネットは, 小学6年(1.45)よりも小学5年(1.73), 中学(1.80)が, 小学5年, 中学生よりも高校生(2.13), 大学生(2.29)が簡便であると知覚している( $F_{(4,1770)}=49.40, p<.01$ ). 高校生・大学生は活字メディアの難しさを実感している一方で, インターネットは簡便であると知覚している. 小学5年生は本を簡便と感じ, 小学6年生は新聞を簡便と感じ, インターネットを難しいと知覚している.

## 4. ま と め

全体的な傾向として, 学年が上がるにつれてメディア活動間の距離は大きくなり, メディアの特性の違いを大きく知覚できるようになるようである.

次に, 学年別の特徴では, 小学5年生は他の学年との比較において本は速報性があり, 簡便と感じる傾向がみられる. またインターネットの信頼性が高いと知覚している. 小学6年生は新聞の速報性が高く簡便であると感じ, テレビは信頼でき, インターネットを難しいと知覚している. 中学生は, テレビは速報性があり, 信頼性も高く, 簡便であると感じている. 高校生は, インターネットは速報性が高く簡便と感じている. 信頼性では新聞

が高く、本を好んでいない。大学生は、インターネットは速報性が高く簡便であるが信頼性は低いと知覚している。信頼性では本と新聞が高い。また、小学5年と6年の差は予想ほどシャープではなかった。

メディアの特性として、速報性、信頼性、嗜好性、簡便性がどのように位置づけられるのが妥当であるのかについては、さらに検討が必要である。例えば、ネットは速報性が高く簡便であるが信頼性は低い、というような知覚は妥当と考えてよいのであろうか。このような議論と合わせて、本研究の知見をメディア・リテラシー育成に活かしていくことが期待される。

今後の課題として2点挙げる。第1に、こうした知見を踏まえてメディア・リテラシー育成プログラムを作成する。具体的には、自分の先有知覚データに基づいて、自分がどのようなメディアを速報性があると感じ、どれだけ信用し、好み、簡単に思っているかを省察し、日常のメディア利用を自己分析する活動を取り入れる。

第2に、調査研究の蓄積を挙げる。本調査データは中学校3校、高校1校、大学4校という限られたサンプルからのものであり、得られた知見は限定的なものである。対象を拡げるとともに、小学校高学年から中学校までの発達をピンポイントで捉えるシャープな尺度も必要である。ケータイなど新しいデジタル・メディアを組み込み、調査を継続的に積み重ねる必要がある。

### 参 考 文 献

- 後藤康志 (2007a) メディア・リテラシーの発達と構造に関する研究. 新潟大学博士学位論文
- 後藤康志 (2007b) 学習者の Web 情報に対する批判的思考の発達. 日本教育工学雑誌, **30** : 13-16
- 後藤康志・生田孝至 (1999) 受信・発信メディアに対する児童の先有知覚に関する研究. 日本教育工学会誌/日本教育工学雑誌, **23** : 85-88
- 東田充弘・河野恒興 (1986a) テレビ視聴能力の評価. 水越敏行(編著) NEW 放送教育. 日本放送教育協会, 東京, pp.288-311
- 東田充弘・河野恒興 (1986b) 理科番組視聴能力と学年発達. 水越敏行(編著) NEW 放送教育. 日本放送教育協会, 東京, pp.210-250
- 生田孝至・井上光洋・若林尚樹・木原俊行 (1995) 映像視聴能力の発達と高等教育におけるメディア利用に関する基礎研究. 松下視聴覚教育財団研究開発事業 (研究調査助成) 研究報告書
- IKUTA, T. and GOTOH, Y. (2001) A study of Children's Preconceptions to Communication Media. Paper Presented at the Annual Conference of the British Educational Research Association 2001, University of Leeds, UK
- IKUTA, T. and GOTOH, Y. (2002) A Comparative Study of Children's Preconceptions to Communication Media between China and Japan. Paper presented at the Annual Conference of the British Educational Research Association 2002, University of Exeter, UK
- 今井真悟 (1993) 児童のメディアに対する先有知覚と教師の指導法との関係. 新潟大学修士論文
- 鬼頭尚子 (2004) 子どもたちとメディア. 国立教育政策研究所(編) メディア・リテラシーへの招待 生涯学習を生きる力. 東洋館出版, 東京, pp.17-26
- 文部科学省 (2002) 情報教育の実践と学校の情報化～新「情報教育に関する手引」～. 文部科学省
- 無藤隆・白石信子 (1999) 子供のメディア利用と生活行動の変容～小・中・高校生調査による最近の動向と考察～. NHK 放送文化調査研究年報, **44** : 255-315
- 中野佐知子 (2000) インターネットユーザーはテレビをどう見るのかー日本人とテレビ・2000より. 放送研究と調査, **50**(11) : 26-35
- 佐賀啓男 (1988) 多メディア利用事態における学習者のメディア知覚と教師の役割. 放送教育開発センター研究報告, **9** : 95-115
- SALOMON, G. (1984) Television is "Easy" and Print is "Tough". *Journal of Educational Psychology*, **76** : 647-658

(Received March 30, 2008)